
翡翠の瞳の竜使い

アズマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翡翠の瞳の竜使い

【Nコード】

N6360Z

【作者名】

アズマ

【あらすじ】

世の中に倦んだ竜使い
ゆくプチ鬱ファンタジー。

ルカが王都に招かれ少しずつ変わって

01 風花

冷たい風にルカは頬を染めていた。

『今日、寒イ、帰ロウ。』

「うーん、もう少し。ありがとう、インディゴパール。」
甘えるような命令。

インディゴパールは名前の通り藍色で真珠のように柔らかな光沢の鱗を持つ竜で背中に乗る主、ルカをいささか過保護に気遣う。

ルカは絶望を抱いた竜使いだった。

天涯孤独で、地位も財力もない子供の身の上では、竜と自在に対話する能力はその運命をねじ曲げるに十分だった。

ルカ竜の背で空を飛ぶのを好んでいた。

薄く微睡むようなまばたきをしながら、遠い山の端と空の狭間を見つめていたら、彼女の中の悪魔が囁いた、（ああ、この瞬間ならばそのまま息絶えても構わない）と。ルカは凍てつく風と舞う雪の花を今暫し楽しんだ。

ルカの住まいは山の中、森の奥である。

何かと不便だが竜と暮らす上での気安さは何物にも換えがたかった。

『犬ノ臭イ。』

来客だ。

道に迷った猟師あるいは主とはぐれた猟犬、そのどちらでもなければ、あまりありがたく客、すなわち、犬ぞりを駆ってまでルカに会いに来た客だ。

「ナージャシルカ・ウルク・モイライ殿ご在宅か？」

ルカは軍服の青年に形ばかりの礼を返す。

「ええ。私がナージャジル力です。……、竜と私に何かご用が？」

「王都にお見え願いたい。先にみまかられた、宮廷魔術師カーミット様のご遺言である。」

ルカは青年を値踏みした。騎士としてはまだ日が浅いだろう。くすんだ青い瞳はどこか興奮していて、使い走りの役を王国の大事だなどと誇らしげだ。

（筋肉バカ。）

「私は行けませんとは言えないのでしょうか。五頭分の牛の肉とレタスを15樽、葡萄酒を二樽ご用意下さいませ。お城にお部屋の準備ありませんわ。私は竜の隣で眠ります。」

ルカの王都訪問は冬至の祭りの七日前と決まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360z/>

翡翠の瞳の竜使い

2011年12月21日10時45分発行